

『友人T①』

✽

環状七号線を歩くのは、何回目だ？

僕たちは、缶チューハイを片手に足を前へ前へと動かしているように見せながら、かれこれ三十分以上、その場で足踏みをしていた。

道行く人間たちは、僕たちの動きに戸惑いをみせているのか、それとも自分が正常に進んでいることに不安を抱いているのか、僕たちの前を通り過ぎるとき、老若男女問わず、必ず逆立ちをした。

犬を連れている人間はもちろんのこと連れられている犬までもが自らの力で逆立ちをした。

「いつまで続けんねん！ 日が暮れてまうやろ！」

先に痺れを切らした僕はおもわず言葉を漏らした。
自分の声を耳にした瞬間、悔しさが滲み出る。

僕たちは、夜中の十二時に国道246号と環状七号線の交差点で待ち合わせて、近くのコンビニエンスストアで缶チューハイを買って、五分ほど歩いてから三十分以上歩くふりをしていた。

だから、どれだけ足踏みを続けても日は暮れている状態なのだ……。

『夜が明けてまうやろ！』か『日が昇ってまうやろ！』の、どちらかだったなあ、と安易な発言に焦点を当てて意識的に反芻してやる。

僕は、まだ足踏みを続けている友人Tに、『今のツツコミは間違いだっただ』と伝えようとした。すると、彼は何かを察したのか、大きく首を横に振ってから、『新之助しんのすけさんは分かってくれてるから大丈夫や』と優しい口調を放って、足踏みを止めた。

僕は反射的に、『じゃあ松田まつださんは？』と問いかけていた。

『分かってくれてる。イワシ師匠も分かってくれてるよ』と伝えてくれたTに向かって、『別にイワシ師匠の意見は聞いていないのに』と心の中で呟きながらも、口角がぐうっと

上がっていることに安堵している。

「やっぱり凄いなあ、Tは」

彼は、『ものごつつええ感じやろ?』と言って颯爽と走り出した。

*

僕たちは、お笑い芸人ではない。けれども、お笑いを愛している。一度、Tに訊ねたことがあった。

「Tはさ、お笑い芸人目指してるの?」

すると、彼はこう答えた。

「お笑い芸人って何だと思う?」

僕は二三秒真剣に考えるふりをしてから、

「F1レーサーになること?」

と伝えてみた。

Tはコンマ一秒も開けずに、『おいつ、お笑い芸人目指してて気が付いたらF1レーサーになっていましたみたいな奴世界中探してもどこにもおらんやろっ』と一息でまくし立ててから、お得意のウインクを披露してくれた。『どや?』

*

颯爽と走るTの背中を見て感慨深くなっていたとき、

ドーン。

ドーン。

と、上空に花火が打ち上がった。

真夜中の環状七号線に打ち上げ花火。どうして? 単純に思った時、振り返ったTが言った。

「祭りやなあ」

「なんで屋台出てへんの？ 祭りやのに」

と訊ねずにはいられなかった。

「なんで屋台出てへんと思う？ 祭りやのに」

とTが聞き返してきた。

僕の頭の中には、祭りとは全然関係のないことが浮かび上がっていたのだが、Tにばれないように必死に祭りのことだけを考えている素振りを見せた。

するとTは何でもお見通しと言わんばかりに、『安心せい。新之助さんも同じことおもてると思うわ』とグーサインを見せてくれた。

僕はたまたらず、『^{はまもと}浜本さんは？』と訊ねている。

「浜本さんは何も考えてへんのちゃうかあ？ あの人は感覚でやらはる人やろうからなあ……と思わせて、めちゃくちゃ考えてはると思うで」

さも会ったことがあるかのような口調で言い放つTに、『松田さんは？』と付け加えてみた。

「松田さんは同じこと思ってくれてる。もちろん、イワシ師匠もや」

Tの瞳は、スケスケに透き通っていた。

「それにしても綺麗やなあ」

Tは、花火が大好きだ。一番好きなのはサッカー。その次に花火。三番目に台湾ラーメン。打ち上がる花火を見ながら台湾ラーメンを食べてリーガエスパニョーラについて思索する。これが、Tの人生における最大の幸福的瞬間なのかもしれない。

「ほんまやね」

僕も空を見上げたけど、なぜだろう？ 心のざわめきが止まらなかった。

念のためTに、『周りの状況、知ってる？』と聞いてみた。
するとTは、『至って平常運転』と返してきた。

本当に気が付いていないだけなのか、
それともボケなのか……。

嘘であつて欲しいと願うが、周りからは、

『打ち下げ花火って言うのかなあ？』

と、散歩中の犬までもが何かを訴えるように吠えていた。

Tは、名残惜しそうに缶チューハイを一口飲んだ。

「これから、逆立ちの世界が訪れるの？」

Tは、『あそこを見ればすべてが分かるよ』と静かに指を差していた。

髪の長い人間が、逆立ちをしている。

髪の毛は膝くらいまであるだろうか？

彼の髪の毛は地面に這いつくばっていた。

空は暗くて表情なんて見えるはずなのに、と思った僕に、『花火の光が彼の顔を照らす』と優しく語り掛けてから、『もうすでに彼はこの世を去った』とつぶけた。

まさか……と思って彼の存在を確かめようと視線を向けたけど、髪の毛膝くらいの姿は見たたらなかった。すぐさまＴの元へ視線を移すと彼は、『新之助さんも同じことと思ってるやろなあ』と言った。

僕が次の言葉を選ぶ前にTは、『松田さんもイワシ師匠も同じことしてるよ』と伝えてくれた。

『浜本さんは?』と聞こうとも考えたが、そこまでするとくどい気がしたからここで終わらせることにした。

打ち上げ花火は、フィナーレを迎えようとしていた。

どうしてフィナーレだと分かるのかって?

打ち上がる数が極端に増えたからだ。

僕とTにとっては打ち上げ花火。

その他にとっては打ち下げ花火……を眺めながら感極まっている状態と周りにいる生命体すべてが逆立ちをしている異様な光景とが相まって色めき立った。

なんとなく、『次の花火が最後の一発だなあ』と思ったとき、隣に居たTが、『次が最後の一発になりそうやなあ』と零した。

これが以心伝心かあ。

と、僕はTに対して感慨深い気持ちになった。

「なあ」

とTが語り掛けてきた。

「世界は逆立ちをしてさかさまになってしまった。でもね、この最後の花火が音を立てた時、また世界は動き始めるよ」

ピューー。

最後の花火が、夜空に向かってゆく。

「さっき、屋台を出せる人間がこの世界から居なくなっちゃった。と言ったがそれは何かの勘違いだったみたいだ。ほら、あそこを見てみな。射的屋があるぞ!」

Tが指さす方向を見つめていた。物陰に隠れる人間が……ん? ゴル31? 僕の目には物陰に隠れて銃を構える男の姿が映っていた。その男がゴル31に登場するデュー西郷さいごうにそっくりなのだ。もしかして、アニメの世界に入り込んでしまったのか?

ドーン!

最後の花火が真夜中に舞った。

それは、それは、大きな音の花火だった。
綺麗だなあと感じて、Tに何かを伝えようとしていたことを思い出したときには、懐
りが重かった。

物陰に隠れる男は背中を向けて静かに去っていく。
どうしてアイツは逆立ちをしていなかった？

亀のようにゆっくり見えるゴルの動きが、異常事態を知らせてくれた。

ハロウィーンでもないのになぜ仮装を？

あれが彼の普段着なのか？

いや、待てよ？ 殺し屋は自分のことを『殺し屋だ』なんて言わないだろう。心理を逆
手にとって『コイツ、殺し屋の格好をしてるけど絶対殺し屋じゃないよなあ』と油断させ
るためのテクニクだったのか？

どちらにしても、僕は撃たれた。

あの、アニメの中で撃たれた人たちの気持ちは、こんな感じだったのだろうか？

「デュー西郷、貴様……」

膝から崩れ落ちる僕の肉体は、朦朧としていた。

段々と耳が遠くなっていく……。

逆立ちしていた生命体が二本の足で立っていることを知った。

地面に崩れ落ちた僕が逆さまから見ているだけかとも考えたが、本当に皆、逆立ちを止
めて二本の足で歩いていた。

髪の毛が膝くらいまであるだろうと思っていた彼の髪の毛は本当に膝くらいまであっ
た。

僕の憶測は間違いじゃなかった！ と安堵した。

世界が遠くなっていく。

深く海に沈んでいく。

近づいてくる足音が、僅かに聞こえた。

ん？ 身体が少し起き上がったか？

そこには、Tの姿があった。

僕の目を見ながら、周りに向かって、僕に向かつて、必死に何かを叫んでいた。

助けて、下さい？

平川賢太郎ひらかわけんたろうの『瞳を閉じたまえ』が頭の中に流れ出していた。

駄目だろ！ 今、瞳を閉じたら死んでしまうぞ！

と、誰かが話しかけてくる。

でも、瞳を開けるよりも閉じる方が、今は楽だよ？

と、本気で思ってしまった。

いつのまにか、瞳を閉じていたみたいだ。

想像のなかでは開いていたはずの瞳が、現実世界では閉じられていた。

血液が噴き出している感覚だけが、肉体に残っている。

もう、何も聞こえてこない。誰も居ない……。

逆立ちする犬も、

打ち下げ花火も、

何もかもが遠い昔のように感じてしまった。

過去の思い出が溢れ出てきた。

あんなこともあったっけ……。

こんなこともあったっけ……。

死ぬ間際にしか振り返れないのならば

死ぬ間際まで余計なことは振り返るな！

又、誰かが話しかけてきた。

やりたいことをやればいい。

何をやっても傷つけるし傷つけられるし

衝突するし批判されるし非難されるし

自分を良く見せようなんて一ミリも思わなくていい！
まずは自分が何を想うかだ！

すべてのノイズが遮断されて、Tの輪郭だけが浮き彫りになっていく。

少し眠っていたのだろうか？

必死に訴えるTの口元に視線が向いていた。

最後に何を言ってくれるんだい？

T。

僕は君と出会えて最高だったよ。

君は僕に言ってくれたよね、

『君が居ない人生は人生じゃない』

あの言葉、嬉しかったなあ。

来世でも又、会えるかな？

ねえ、T。ありがとう。

本当に、ありがとう。

君が居てくれて良かった。

僕は本当に、幸せ者だ！

今まで聞こえなかったTの声が、薄っすらと聞こえた。

「俺、お笑い芸人になるから！」

僕は、その言葉を最後に深い眠りについた。

*

目が覚めると、知らない天井があった。

少しずつ焦点が合わさってくる。久しぶりに光を味わう気がする。
人影が、四つ……。家族が泣いている光景が飛び込んできた。

「分かるか？」

寡黙な父親が珍しく昂っていた。

わずかに頷く僕に、『三年間も眠っていたのよ』と母親が大粒の涙を零しながら言った。

三年も眠っていたのか……と暢気に思った瞬間、三年も眠っていたのかよ！ と慌てふためく自分が心の中で交錯している。

じんわじんわと脳みそが動き出す音がして、記憶が再生されていく。

あの日、僕は、デュー西郷に撃たれて救急車で運ばれたらしい。

八時間にも渡る緊急手術の末、何とか一命を取り留めたらしい。

回復の見込みはほんの僅かだと告げられたらしい。

それでも家族は僕が回復することを祈って、

眠りつづける僕を介抱してくれたらしい。

騒ぎを聞きつけた仲間が見舞いに来ては、

『早く目を覚ませよ！』と劳いの言葉をかけてくれたらしい。

Tは一度も見舞いに来なかったらしい。

眠りつづけた三年の間に、僕は一度だけ大きすぎるオナラをしたらしい。

家族や医師はそれを回復の兆しだと受け止めて大喜びしたらしい。

けれどもそれ以降、僕はオナラをしなくなったらしい。

家族や医師は又、深い暗闇の底へ突き落された気分になったらしい……。

これは全部、母親から聞いた話だ。

奇跡的に目を覚ました僕に、医師は驚いていた。医師や家族は僕がオナラをするたびに大喜びした。ハイタッチをしたりグータッチをしたり、心の底から喜んでるように見えて変な気分になった。

オナラをして大喜びされている自分は、戻ってきても良かったものだろうか……と。

一か月後。

急激な回復力で、『もうすぐ退院できそうだ』という医師の言葉を受け取った僕は、三年ぶりにテレビつけた。

少し戸惑いながらも、目を開けて情報を掴み取っている自分に感極まっている。

死に際まで行って戻ってきた。

三年間も眠っていた……。

『さあ、やってまいりました。日本GP。ポールポジションはなんと！新進気鋭のF1ドライバー。ここ、母国でナンバーワンの座に輝けるのでしょうか。楽しみです！』

テレビではF1中継が流れていた。

僕の脳裏には、Tの姿が浮かび上がっていた。

彼は今、何をしているのだろうか？

彼は、僕が眠る三年間で何かを成し遂げたのだろうか？

『それではまもなくスタートです！』

テレビ画面には、ポールポジションで意気込む新進気鋭のドライバーの姿が映っていた。

フルフェイスヘルメットを付けているため、顔は分かりにくかったが次の瞬間、そのドライバーのVTRが流れ始めた。

「絶対、優勝します！」

カメラの前で意気込む人間を見た瞬間、開いた口が塞がらなかった。

「なんでやねん」

『お笑い芸人目指してて気が付いたらF1レーサーになっていましたみたいな奴世界中探してもどこにもおらんやろっ』

Tはあの瞬間、人生を懸けたボケにチャレンジしようとしたに違いない。